至誠沈勇

米内光政会会報　第五号



写真提供：盛岡市先人記念館

目　次

令和七年度（第六回）総会報告……米内光政会編集部　1

講演会　我が国の安全保障政策と課題……元自衛隊統合幕僚長　岩崎　茂　2

米内光政をめぐる人々Ⅴ　米内光政の母トミと妻コマ……米内光政会会長　藤井　茂　4

特別寄稿　第七十四回企画展
戦後八十年「最後の海軍大臣米内光政の手紙」を開催して……盛岡てがみ館館長　紀　修　10

ゆかりの地・人の紹介　和協一心の精神……矢巾町町長　高橋昌造　14

令和7年度事業　調査活動　八十回忌に向けて米内光政閣下生誕地の確認調査……米内光政閣下生誕地調査チーム　17

年次事業実施状況……　20

■令和七年度（第六回）総会報告

米内光政会編集部

米内光政会第六回総会は、令和七年四月二十日（日）に、米内光政閣下菩提寺の紫雲山円光寺において開催致しました。

当日は米内閣下のご命日であり、総会に先立ち本堂で七十八回忌の法要を営みました。多数の皆様のご参列を賜り、深く感謝申し上げます。

総会では鎌田副会長の挨拶の後、高橋矢巾町長からご祝辞を頂戴いたしました。議事事項として、令和六年度事業報告、会計報告に続き、内藤監事から会計監査報告があり、ご承認をいただきました。次に令和七年度事業計画と予算案について説明がありました。事業計画の内容といたしましては、法要、総会の開催、盛岡八幡宮境内にある米内閣下銅像周りの清掃、会報発行、米内閣下生誕地の調査、市広報等への広告掲載などが示され、予算案とともに全会一致で承認されました。

引き続き第二部の講演会を開催し、今回は元自衛隊統合幕僚長岩崎茂様から「我が国の安全保障政策と課題」と題し、ご講演を頂戴いたしました。

講演終了後、恒例の海軍カレーのお振る舞いがあり、皆様には好評をいただきました。



■講演会

講演者／元自衛隊統合幕僚長　**岩　崎　茂**　様

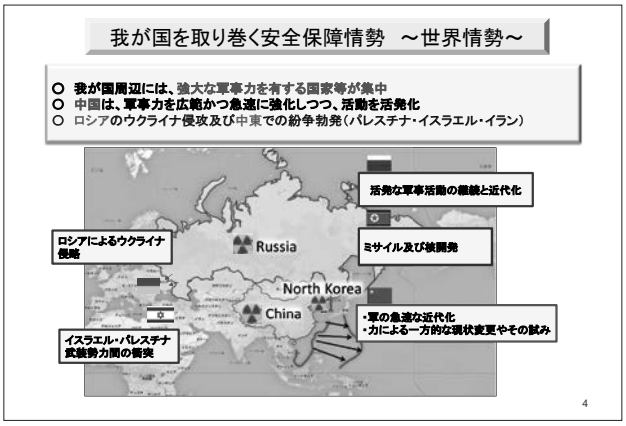
演　題／**我が国の安全保障政策と課題**



岩崎様には約一時間の制約のある中で、現在の日本国が置かれている状況や、我が国の安全保障政策、今後の課題などについて、貴重なご講演を頂戴いたしました。当日の写真とご講演の内容について掲載いたします。

1　我が国を取り巻く安全保障情勢（世界情勢、中国、北朝鮮、ロシア）

日本は中国、北朝鮮、ロシアの三正面と対峙している。非常に厳しい状況にある。なおかつ、尖閣諸島には中国が領有権を主張し、様々な工作を働きかけている状況である。

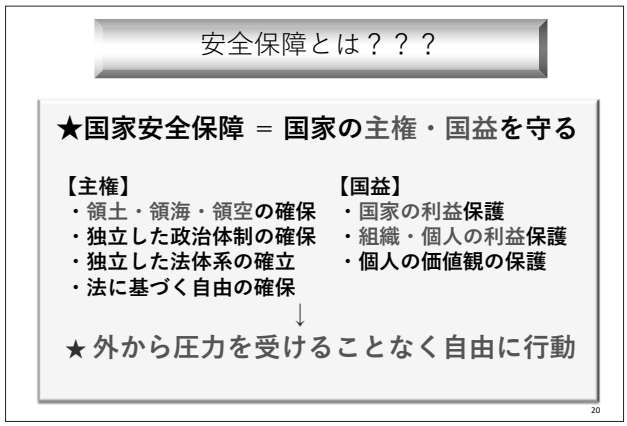




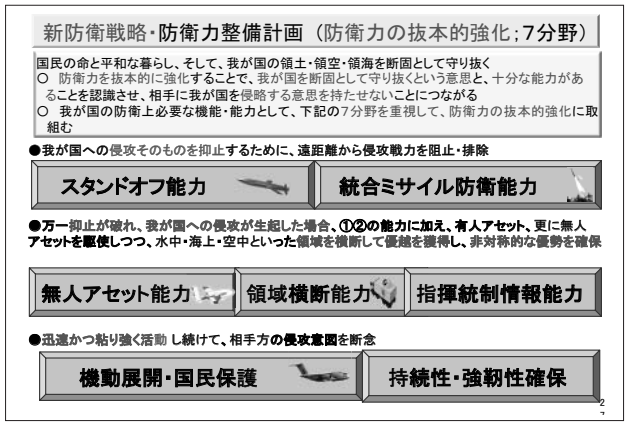
2　我が国の安全保障政策（戦略三文書）

国家安全保障とは、国家の主権、国益を守ること。外からの圧力を受けることなく、自由に行動ができること。そのための新防衛戦略として、スタンドオフ能力、統合ミサイル防衛能力、領域横断能力、国民保護等の強化が重要である。









3 自衛隊の統合運用の一例

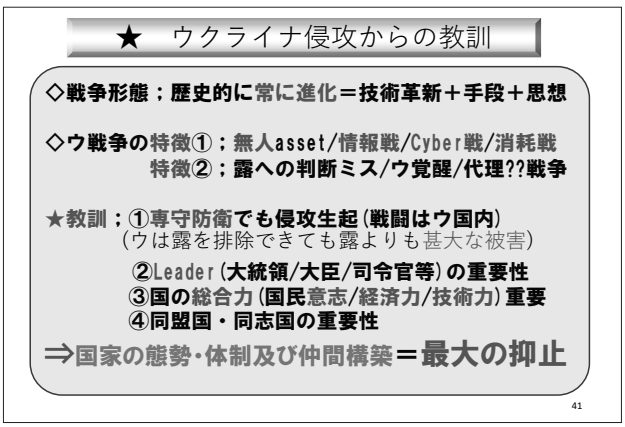
・グレーゾーン事態への対応
・宇宙、サイバー、電磁波領域での対応
・日米同盟に基づく米国との共同

一例であるが、このような多岐にわたる統合運用を実施している。

4 今後の課題

ウクライナ侵攻からの教訓として、専守防衛を表明していても、侵攻は生起する。まさにウクライナでは、国内で敵を排除しても、相手国より被害は甚大になる。この場合、同盟国、同志国の存在が重要である。国家の態勢、体制及び仲間構築が最大の抑止力になる。

今、世界は生き残りをかけた競争の時代。変化に敏感な者が残る。時代の変化を読み、自ら変化することが大事である。



■米内光政をめぐる人々　V

米内光政の母トミと妻コマ

米内光政会会長　藤井　茂

厳しく育てた母

米内光政の母トミ（盛岡の松尾家の出）は、ほとんど一人で娘ヒサ子と息子光政を育てたも同然だった。早くから夫の受政（ながまさ）が出奔してしまい、盛岡にはいなかったからである。

受政の出奔は盛岡が市制をしいた明治二十二年（一八八九）だった。人望があった受政は、選挙でトップになり初代市長に就くはずだったが、時の知事・石井省一郎の横やりが入ってなれなかった。石井は米内の自由民権論者であることを嫌い、二番目だった目時隆之を市長にしたのだった。そのため受政は上京し発明の道に入ってしまい、生活費を送ってくるはずもなかった。



米内の母トミ

母トミはそのため、二人の子どもの養育に並々ならぬ苦労をした。幸い手芸や裁縫に秀でていたために、それで毎日の生計を立ててはいたが、いつもぎりぎりだった。夫がいないこともあって、二人の子どもたちには意識的に厳しくしつけたものだった。姉ヒサ子も光政もそれを分かっていたせいか、いくら厳しくされても母トミに口ごたえなど一切しなかった。

そのことに関して姉ヒサ子は、次のように述べている。

「私から見て多少母親が無理を言っていることが分かっても、弟は終生、けっして親に対してタテついたり、小言を言ったりしたためしはございませんでした」

光政には、戦後の心理学者が述べているような、いわゆる反抗期が際立って見当たらない。同時代人で盛岡中学（現盛岡第一高等学校）の後輩でもあった金田一京助（アイヌ語学者）も野村胡堂（大衆小説家）も田子一民（政治家）も、あるいは石川啄木（歌人）もそうかもしれない。学校の教師には少しくらいあったかもしれないが、親にはそういう反抗は見えないのだ。この時代の偉人たちの共通項として挙げてお

いていいかもしれない。

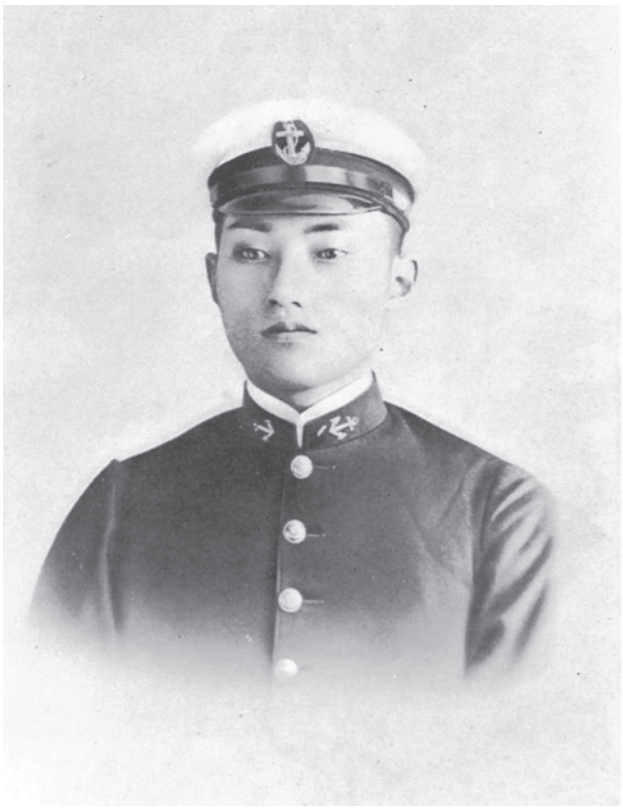
姉のヒサ子に戻るが、普段の生活に関して彼女は、意外にもそれほど貧しいとは感じてはいなかったらしく、次のような受け答えをしている。

「今まで（いろいろな本や雑誌などで）書かれたり語られたりしたところによりますと、当時の私どもの生活は、世にいう〝赤貧洗うが如し〟というような風になっておりますが、なるほど私たちはお金持ちではありませんでしたけれども、決してその日に事欠くというようなことはありませんでした。もっとも母は得意とする裁縫でお弟子を取ったり、賃仕事をしたりしてはおりましたが…。弟は、貧乏で冬に足袋も履かせられなかったとか、中学一年から五年まで一張羅の制服で通したとか（という噂はしきりに書かれておりますが、そうではなく）当時中学生の風習は、冬季に足袋を履かぬのを一種の誇りとしていました。つまり質実剛健、豪傑を気取っていたのです。そんなわけで、足袋などは履きませんでした。また弟は小さい時から発育が良く大柄でしたから、常識で考えて、どんなに無理をしても、一年生で着た制服が五年生まで持ち続けることはできません。勿論たびたび新調したことなどはなかったでしょうが、名久井（ヒサ子の夫）のお古などもあったでしょうし、そのうえ厳格な母のことでございましたから、そのつど十分とは参らなくとも、ともかく見苦しくないような服装はいたさせておったようでございます」

のちに教育者になった高藤太一郎は、当時の米内家の様子を次のように描写している。

「私が訪ねていくと、お母さんは薄暗いランプの下でお針をしているし、米内君と姉さんはお母さんの前に机を置いて勉強している場面によくぶつかったものでした。お母さんは謙遜で落ち着きがあり、しかしその反面、非常に明朗なかたでしたから、米内君は癖のない珠（たま）のように気品のある、すらりとした少年ぶりでした」

そんな家計を思って光政が進んだのは、海軍兵学校だった。盛岡中学校（現盛岡第一高等学校）はそのころ、日清・日露の時代の要請もあって軍人志望が多かった。成績が良く



若き日の米内

て家計も順調であれば旧制高校へ進み帝国大学へ進むという道もあったが、光政の家は貧乏世帯だったので、成績は良かったものの、金のかからない軍人の道に進まざるを得なかったのだ。母トミも光政の志望を後押しして励ました。

明治三十四年（一九〇一）、光政が海軍兵学校を終えてからは、トミはいつか息子と一緒に暮らすことを夢見ていた。少尉に任官したとはいうものの、光政はまだ母を呼べるような状態ではなかったが、ついに二年後に実現している。

父受政は十年余り前から東京にいたので、父とともに三人での水入らずの生活が始まったのである。親子三人で暮らしていたうえに、発明好きの父の研究費まで光政が出していたというから、光政の負担は決して軽いものではなかった。

あるとき母トミは、それを見かねて光政にこんな提案をした。

「この貧乏世帯から、お父さんの研究費を出すのは大変だから、しばらくの間、研究のほうは断念してもらおうじゃないの」

そんな母トミの提案にもかかわらず、光政は黙って続けさせている。親のすることには絶対的に従うというような無条件ともいえる規範を、光政は心の中にしっかりと持ち合わせてでもいたのだろうか。

しかし、結局はほとんど実ることなく昭和二年（一九二七）秋、父はこの世を去ってしまった。

しっかり者の母トミは、米内家の家計を一手に握っていた。それは光政が海軍大臣になっても総理大臣になってからも同じだった。盛岡中学以来の友人で、のちに衆議院議長や農林大臣にまでなった田子一民が米内家に寄付のお願いにうかがった時のこと、用件を了解した米内は奥の方に行き、しばらくして一枚の紙幣を手にして、田子にこう言っている。

「今、母から小遣いをもらってきたので、少ないけれど、これで我慢してください」

この一件で田子は、米内の母トミが米内家の大黒柱であることを改めて知ったという。

トミは息子光政よりも長生きをしたので、息子の死を看取っている。光政が亡くなったのは、敗戦後の昭和二十三年（一九四八）四月二十日のことだった。六十八歳と一か月だった光政の病気は、神経痛の後に襲ってきた帯状疱疹だった。

息子の死の直前、枕元で黙祷しながら、いつまでも頭を上げようとしなかった母トミの姿は、居合わせた人たちの悲しみをいっそう誘ったものだった。火葬場へ向かう息子の棺に取りすがり、泣きながら次のように話しかけていたという。

「光、光、なんでわだすのごと残して先に逝ったんだ?」

既に昭和二年に夫受政を亡くし、今まで一家の頼みとし心の支えともした息子を、今また失ったトミの悲しみは、いかばかりだったろうか。

それから五年後、トミもまた静かにこの世を去っている。

寄り添った控えめな妻

おそらく、歴代の総理大臣の中で米内光政ほど貧乏だった人はいなかっただろう。自らの清らかな性格のせいもあるが、前述したように、父の投機ともいえる仕事にお金を融通し続けたからである。自分の給料で足りないときは、友人たちから借金をしてまでも父に研究を続けさせたと、ものの本には書かれている。もちろん、父の発明はほとんど成功することもなく、したがって米内はいつまでも借金をかかえ続けなければならなかった。

そういう米内一家に、コマは嫁いできたのである。必然的に子どもは生まれるし、それにともなって必ずしも米内の給料が上がっていったわけでもないので、コマ夫人は最初からお金の苦労を背負ったも同然だった。



米内の妻コマ

そういうことに文句も言わず、隠れるように寄り添ったコマ夫人。彼女は生涯、非常に控えめに米内に仕えた人で、米内にはじつに似合いの妻であったといえる。

思うに、米内が辛抱強く目立たないコマという女性を嫁に迎えたということ自体が、米内の性格を表しているように感じる。夫人から夫が、夫から夫人が推しはかられるのは、いつの世でも同じだからだ。

コマは米内より八歳年下の明治二十一年（一八八八）、東京赤坂の生まれで、米内が中尉のとき嫁に来た。日露戦争が終わった翌年の明治三十九年（一九〇六）六月のことである。コマの父は大隈金太郎といい、お茶の師匠（号は宋民）をして暮らしていた。

米内の日常は、子どもたちから見てどのようなものだったのだろうか。

「家庭における米内は、案外おもしろい、おかしな親父であった。公務以外のことならボツボツ話もするし、冗談も言う。日曜大工を試み、桐の古箪笥の変な色の塗料を塗って出来栄えを子どもたちに冷やかされたり、新橋で宴会の後、歩いていたら足が痛くなったといって、途中から新しい靴を手にぶらさげ、はだしで帰ってきたこともある」

すでに海軍内で重鎮になっていた米内は、宴会などで重鎮らしい態度で海軍のことをしゃべり散らすかといえば、そうではなく、いるかいないか分からないほどに黙々と酒を飲んでいることが多かった。

だから、連れだって飲みに行っても、しぜんに芸者連中にもてるようになっていったのも当然だった。艶聞の一つや二つはあったようだが、特に問題にもならなかったのは、付き合い方がきれいで、さっぱりしていたからであろう。おそらくその背後には、コマ夫人の寛大な心もあったはずである。長男剛政が「昔風ではあるが、夫婦仲は円満であった」と語っていることからも、それが証明される。

そのようなコマ夫人が亡くなったのは、昭和十六年（一九四一）一月十九日だった。その折、子どもたちの前で米内が初めて涙を見せたときのセリフがある。



在りし日の米内

「結婚して三十四年、任地へも連れていかず、貧乏生活の苦労ばかりさせて、これからどこか遊びに連れ出してやれるかというときに、お母さんは死んでしまったね。かわいそうなことをしてしまった」

葬儀はまったく質素で、これが半年前まで総理大臣だった人（米内は昭和十五年一月から同年七月までの半年間、首相であった）の奥さんの葬儀かと疑われるほど簡素なものであった。新聞で病名は「胆石に胆嚢炎を併発し…」と発表されたが、胃がんの可能性もあったようだ。というのは、米内が首相の間、コマ夫人は夫の暗殺の噂をしきりに気にかけていたらしく、それで胃の痛みを訴えはじめ、米内内閣が総辞職をしたあとの昭和十五年（一九四〇）十月以降、寝たきりになり、三か月後に死を迎えたからである。まだ五十三歳で、これから夫婦でいろいろと楽しめるという時期だった。

コマ夫人は米内とは対照的に歯切れのいい東京言葉を話したが、内面では東京の人には珍しいほど控えめな女性だった。いつももの静かで、晴れがましい場所にはめったに顔を出さない人でもあった。

米内が横須賀鎮守府長官として主催した宴会場でのこと、コマ夫人が地味な着物を着て、いつものように後ろのほうに隠れているふうなので、副官が次のように促さなければならないほどだった。

「奥さん、ほかの者が困りますから、もう少し正

面にお進みください」

米内は海軍兵学校を中ぐらいの成績（百二十五人中六十八番）で終えたので、のちに海軍大将になるなど本人も思いもしなかったし、他の友人たちも考えもしなかったようだ。だから、普通の進度で昇進していったが、昭和になったころから次第に海軍内で認められはじめ、海軍中将、連合艦隊司令長官、海軍大将というように、ぐんぐんと地位が上がっていった。

しかし、米内家は依然として家計の苦しさから逃れられなかった。その原因はまったく米内の清貧な心がけからきていたといえる。そういうことを示す典型的な逸話が残っている。海軍大佐のころ、欧州に駐在して帰国したとき、母が次のように尋ねたことがあった。

「外国駐在のお手当ては相当多いと聞いているけれど、少しは残っているかい？」

それに対し米内は、平気で次のように答えた。

「お上の命令で外国に駐在しているのですから、その職務遂行のために多額のお手当てはいただいておりました。だから、いただいたものは御用の立つように使いましたから、残りは出ません」

それに対し、母もまた次のように言っている。

「残してくれなかったことが、私への何よりのお土産です」

金銭に恬淡とした米内だったから、彼にはおよそ首相になるとよくあるような金銭疑惑は一つもなく、生涯まったく後ろ指をさされるようなこともなかった。だから、米内は勿論のことコマ夫人にとっても、家計簿に余裕のある時代はついにこなかったのである。

（この文は、『いわて人物夜話』の米内光政の関係文二回分を採用し、大幅に加筆訂正したものである。）

（写真はすべて『米内光政追想録』より掲載）



『米内光政追想録』

■特別寄稿

第七十四回企画展
戦後八十年「最後の海軍大臣 米内光政の手紙」を開催して

盛岡てがみ館館長　紀　修

盛岡てがみ館は、平成十二年六月に開館し、今年で二十五年目を迎えました。収蔵庫には、寄贈等による約四万点の貴重な書簡資料等を保管しています。

当館では、米内光政をテーマとして、平成三十年六月に、第五十六回企画展「米内光政の手紙～良識の提督の生涯～」、そして、今年の六月十八日からは、第七十四回企画展 戦後八十年「最後の海軍大臣　米内光政の手紙」を、書簡二十四通、写真等の資料四十四点を展示し開催しました。



企画展ポスター

【企画展　挨拶文】

皆さんは、米内光政という人物を知っていますか。

米内は、太平洋戦争終結のために尽力した、盛岡出身の海軍軍人・政治家です。

今年は、戦後八十年にあたります。米内は、国際情勢を大局的に見据え、陸軍の主張する三国同盟に反対し続けました。その状況下で誕生した米内内閣は、陸軍大臣の辞任により倒閣せざるをえなくなり、やがて日本は開戦に至ります。そして、敗色が濃厚となった戦争末期には、米内が四期目の海軍大臣となり、戦争の速やかな終結と戦後処理に力を尽くしました。反戦の立場をとり続けた米内は、盛岡市の学校教育の特色である「先人教育」で、小・中学生が生き方を学ぶ先人の一人として採り上げられています。

本展示では、米内について、手紙などの資料をとおして紹介します。

【展示した書簡】

○米内光政が恩師の冨田小一郎に宛てた手紙……八通
○米内光政が三女の和子に宛てた手紙……二通

○米内光政が親友の荒城二郎に宛てた手紙……十通
○米内光政が友人の吉田孤羊に宛てた手紙……二通
○米内光政と三菱重工業常務の郷古潔、海軍航空本部長の及川古志郎が恩師の冨田小一郎に宛てた手紙……一通
○友人の小泉信三が米内の長男の剛政に宛てた手紙……一通

開催期間中には、県内外から一、九一八名の来館者がありました。令和五年にニューヨーク・タイムズ紙で、訪れるべき五十二か所として盛岡が紹介されたこともあり、修学旅行・校外研修先として、北海道二校、青森県三校、宮城県二校、計七校の県外からの来館がありました。

また、期間中の関連イベントとして「ギャラリートーク（展示解説）」を二回（七月・九月）開催しました。各回の定員は十名ですが、米内を慕い、奈良県、愛知県、千葉県といった遠方からの参加者もありました。

来館者アンケートから、感想のいくつかを紹介します。





ギャラリートークの様子
7/5（土）・9/23（火・祝）

●素敵な企画をありがとうございました。米内光政が好きなので色々な資料を拝見できてとても良かったです。新たな米内の一面を知ることができました。手紙は読み返したいものもあったので、難しいと思いますが、有料のパンフレットなどがあるととても嬉しく思います。とても楽しかったです。来れてよかったです！（神奈川県・三十代）

●米内さんの人生、足跡を手紙という視点から初めて知り、若い頃は、首席ではないものの、人柄、人望が厚かったからこそ慕われていたのだと思いました。仕事ちゃんとこなさないといけないと思いました。（盛岡市・三十代）

●たくさんの展示を読んで、米内光政が生きていた時代についてすごく分かりました。学校で習っていたのより、よりくわしく知れてよかったです。（十代・秋田県）

●岩手の人だと知らなかった。とても立派な人だったという事が分かった。生い立ちから、良い人（誠実）だったのだろうと思った。本当は、手紙など、手に触れられれば実感が沸いたりするのだろうと思う。昔の紙や字（言葉遣い）はとても重みを感じる。米内さんの心や思いがそのまま出ている文章に、自分もそうでなければと思うことができて、よい経験でした。（北上市・六十代）

●米内光政のことをより深く学び、また知りたいと関係する資料館の訪問や文献調査などを行っています。今回の展示内容を常設または文書として残してほしいです。（神奈川県・四十代）

●米内さんの手紙は、いつも恩師や家族や友人への尊敬と真心のこもった文章で心が洗われるようでした。また、海軍の軍人として、政治家として太平洋戦争に関わる至誠、歴史も学べました。米内さんの考えと行動に胸が熱くなり、涙が出ました。素晴らしい展示ありがとうございました。（盛岡市・四十代）

●地元出身の名士を手紙と共に解説される視点が新鮮でした。解説も非常に丁寧で読み応えがありました。ありがとうございました。（東京都・四十代）

来館者の中には、当館だけではなく、この後、米内の菩提寺である円光寺も訪れるという方もいらっしゃいました。

『盛岡の先人教育』

盛岡市の学校教育の特色の一つとして、「盛岡の先人教育」があります。これは、各教育や道徳、総合的な学習の時間などの全教育課程の中で、原敬、新渡戸稲造、米内光政など盛岡にゆかりのある先人の生き方を学ぶことをとおして、次代を担う子どもたちに「将来の夢」や「ふるさと盛岡に対する愛着」「目標に向かって努力する心」を育むことを目指した教育です。令和七年度から第三期推進計画がスタートし、二十一年目となる取り組みです。

キャッチフレーズは、『盛岡の子どもたちに「夢」と「誇り」と「志」を』です。

「夢」とは、将来に対する希望。実現したいという願い。自分のめざす理想。

「誇り」とは、自分や自分の故郷に対する愛着。自信。

「志」とは、目的や信念を持って実現に向けて努力しようとする決意。

各学校では、先の五人の先人や地域の先人について学ぶ教育計画を立て、発達段階に応じながら実践しています。

さらに、学校給食では、「先人ゆかり給食」として先人にちなんだメニューで児童生徒に提供されています。

今年の十月二日（木）は、「軍服の平和論者　米内光政給食」として、米内が好んで食べていた「豆腐」や「おから」を取り入れた「おからコロッケ」「豆腐カレー」「野菜の甘酢炒め」「ごはん」「牛乳」、お酒も好きだったことからブドウ味の「ワインゼリー」が出されました。

教員の研修としては、夏季休業中に、教育委員会が主催する公開講座「盛岡の先人講座」「石川啄木講座」「盛岡の先人ウォーク体験講座」が



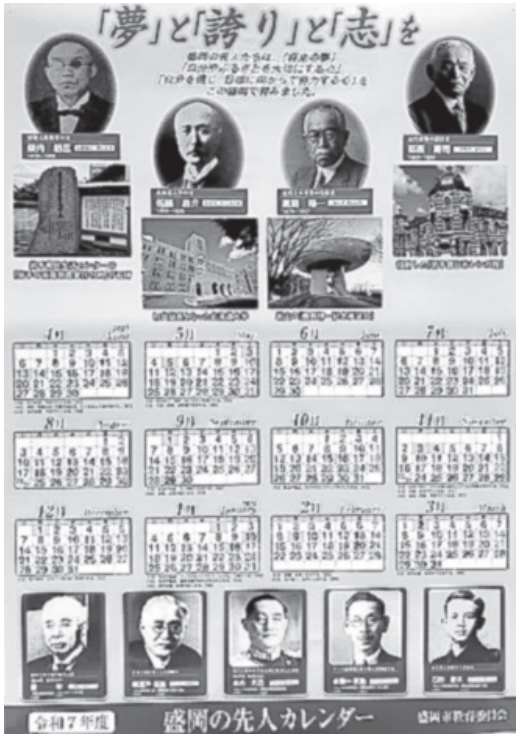
先人ゆかり給食

開設され、指導力の向上が図られています。

各小中学校の教室には、盛岡にゆかりの先人を示した「先人カレンダー」が掲示されています。

カレンダーの下段左から、原敬（初めての平民の総理大臣）・新渡戸稲造（世界平和に尽くした国際人）・米内光政（戦争を終わらせるために努力した大臣）・金田一京助（アイヌ語研究に取り組んだ国語学者）・石川啄木（ふるさとを想う天才詩人）が紹介されています。

今年からは新たに、上段左から、柴内魁三（特別支援教育の父）・佐藤昌介（北海道大学の父）・鹿島精一（近代土木事業の先駆者）・葛西萬司（近代建築の設計者）も紹介されています。



先人カレンダー

『米内光政の恩師・冨田小一郎』

現在、当館では、第七十五回企画展「拝啓　冨田小一郎様―冨田小一郎へのてがみ―」を開催し、教え子から冨田小一郎先生に宛てた手紙などを紹介しています。

米内光政も教え子の一人で、米内から冨田宛の書簡四通も展示しています。冨田は、「数学のよくできた少年で、あまり叱ったことがなかった、さらに、筆耕という仕事をコツコツやっていた。」と盛岡中学生時代の米内を語っています。

【企画展　挨拶文】

冨田小一郎は、海軍大臣や内閣総理大臣を務めた米内光政、アイヌ語研究に尽力した金田一京助、「銭形平次捕物控」を執筆した野村胡堂といった、のちに各界で活躍する人物を盛岡中学校（現在の岩手県立盛岡第一高等学校）で教えたことで知られる教育者です。昭和十四年六月、東京・赤坂の料亭で冨田小一郎を囲んだ謝恩会が開かれ、新聞各社は「日本一の謝恩会」、「日本一の老先生」の大見出しで報じました。

また、実学を重んじ女子教育にも力を注ぎ、私立盛岡商業学校（現在の岩手県立盛岡商業高等学校）校長、私立盛岡実践女学校（現在の盛岡市立高等学校）校長を務め、両校の創設にも尽力し、「女子教育の父」とも呼ばれています。

この展示では、没後八十年にあわせ、教え子たちなどが冨田小一郎にあてた手紙を紹介します。

■ゆかりの地・人の紹介

和協一心の精神

矢巾町町長　高橋昌造

米内光政会会報の寄稿欄をお預かりし、和協一心の精神を胸に、世代を超えて公共の使命を見つめ直す機会としてこの文章を捧げます。

私の知る米内光政閣下とは、終戦に尽力した軍服の平和論者というお姿でしたが、本会総会において、人間としての米内閣下に焦点を当てられた記念講話により、改めて彼のひととなりに感銘を受けたところであります。

私の執務室には、米内閣下の揮毫を複製・表装した額を飾っております。「和協一心」。米内閣下の好まれた語であり、与えられた職分の責任を果たすこと、調和を図り、お互いの心を通じた使命感を持って実践することであります。自衛隊岩手駐屯地の指令室に飾られている複製をいただいた日、私はこの精神を胸に、首長として住民の安心・安全と暮らしの向上を最優先に据え、対話と協働を基本とする行政を推進することを改めて決意いたしました。

そんな私が寄稿に至った、米内閣下とのご縁についてお話ししたいと思います。

初めに、学び舎のご縁です。

一九三八年、第一次近衛内閣が改造された後、岩手県出身の米内閣下と板垣征四郎閣下は、揃ってそれぞれ陸軍大臣、海軍大臣として同時に大臣になりました。このお二人は互いに盛岡中学校、現在の盛岡第一高等学校で冨田小一郎先生の御指導を受けていましたので、盛岡中学校の名前を含め、岩手という地名は一種のステータスシンボルのようにもてはやされ、その盛り上がりようは、「軍国岩手」という言葉が生まれるほどだったといいます。

図らずも私は同校の卒業生であり、米内閣下は大先輩にあたります。「忠實自彊」、「質実剛健」を校訓とし、「時代の先駆者として、社会に広く貢献できる人間を育成する」ことを教育目標に掲げる学校でありましたので、学生時代には、高い知性と教養、たくましい精神力と思いやりの心、強健な身体と豊かな感性をあわせ持つ、それこそ米内閣下のような人間であれと指導を受けたものです。時代は違えど、米内閣下と同じ学び舎で学べたことは、私にとって密やかな誇りでありました。

また、米内閣下の恩師である冨田先生は、当時の盛岡実践女学校の創立に尽力し、校長兼教員を務めています。これは私の妻の母の母校にあたります。もしかすると、冨田先生と米内閣下が対面したあの瞬間を目の当たりにしていたかもしれません。当時の話を聞くことは叶いませんが、縁とは思わぬところで繋がっているものであると感じたものです。



執務室で「和協一心」の揮毫を前に

次に、職位のご縁です。

程度も規模も全く異なりますが、内閣の代表者として総理大臣を務めた米内閣下と一地方自治体の首長を務める私は、どちらも民意に対する責任を負った職位であります。

米内閣下には、自分の言動の誤りを知覚したときには独力で対処し解決を図ることを厭わない責任感と実行力があったと聞きました。その一方で、非常に穏やかで極めて器の大きな方であったとも言われています。

人の上に立つときに部下をどう扱うべきかと問われると、「それぞれの能力で限度内で働いている間は、僕はほったらかしとくよ。能力の限界を超えて何かしそうになったら、気をつけてやらなくちゃいかん。注意しそこなって部下が間違いを起こした場合は、注意を怠った方が悪いんだから、こちらで責任を取らなくちゃあね」「人間にはそれぞれ与えられた幅がある。課長になると、このくらいの幅になって、部下を持つ。次長になるとこうなる。部長になるとこうなる。下をみる時には、幅の中で泳ぐだけ泳がせろ。枠からはみ出た時にコツンとやるのが本当の親切で、そうすればどんどん良くなるんじゃないか」と子息らに話していたという逸話を文献で知りました。

上意下達の一方的な指示による意思決定や異なる意見への非寛容といった支配型リーダーシップとは程遠いところにあり、現代でいうところの支援型リーダーシップにあたるのでしょう。当時の日本では類を見ず、それでいて現代社会で今な

お求められるリーダーとしての在り方であります。米内閣下の姿勢は、上に立つ者としての在り方の指針になるものです。

首長になるという縁があったからこそ、知ることができた側面であり、学び得て生かせるものでもあります。

縁とは不思議なもので、日常のささやかな出来事や偶然の出会いが、やがて大きな力となって私たちを結びつけてくれます。

「人間と言うものは、いついかなる場合でも、自分の巡り合った境遇を、もっとも意義あらしめることが大切だ。」というのは、人と人との縁だけでなく、立場や環境との縁も無下にすることなく、自身の糧へと繋げた米内閣下の言葉であります。米内閣下の至誠沈勇な在り方は、百年以上の時を超え、今なお我々に多くの知啓を与えてくれるものと存じます。逆境の時代を強く、優しく生きていくために、広い視野を持ち、冷静に局面を見据えるとともに、他者を慈しむ気持ちを忘れず、いかなる境遇も自らの糧とするため日々努めて参る所存であります。そして本会の活動を経て、多くの方が米内閣下の精神を自らの心にし、こうした在り方が後世に引き継がれていくことを期待してやみません。

最後に、将来の世代が、過去の歴史と現在の努力を結ぶ確かな道のりとして、穏やかな社会を築いていけるよう祈念し、この寄稿を締めくくります。



■令和7年度事業　調査活動

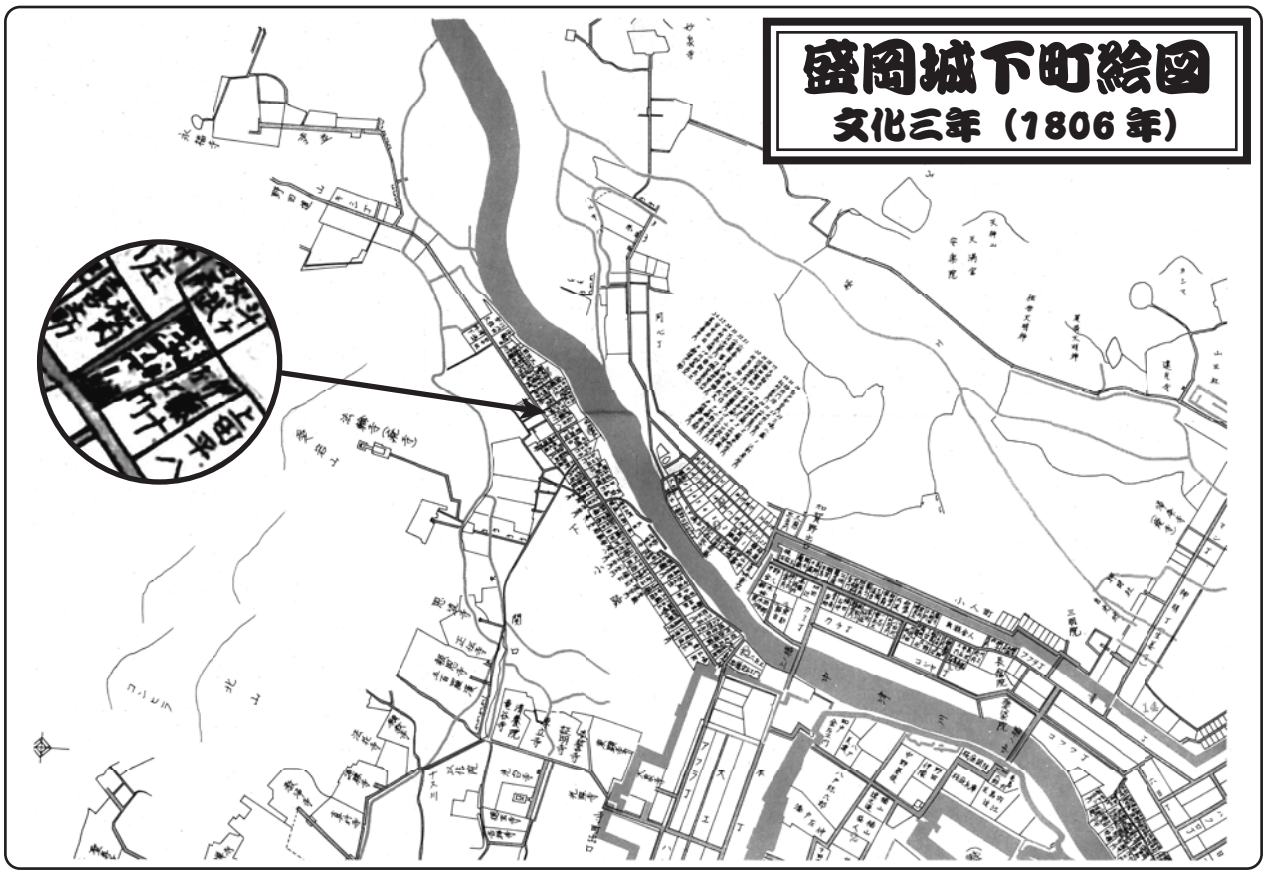
八十回忌に向けて
米内光政閣下生誕地の確認調査

米内閣下が住まわれた盛岡八幡宮の通りには、その所在を示す石柱が建っています。しかし、米内閣下のお生まれになった所在地は、長らくはっきりとしないままになっていました。今回、閣下の生誕の地を明らかにするため、調査を行うことと致しました。

最初の取っ掛かりとして、盛岡市立図書館に伺い、明治時代の盛岡市街地の地図を探しました。米内閣下は明治十三年（一八八〇年）のお生まれですので、当時の状況を把握したいと考えたのです。図書館の担当者の方に来館の意図を告げ、当時の図面を探していただきました。そこで出てきたのが、明和八年（一七七一年）作成の盛岡分間絵図と文化三年（一八〇六年）作成の盛岡城下町絵図です。最初に幾分



盛岡城下町絵図による検討



明治に近い盛岡城下町絵図を見ることにしました。米内閣下の生誕地は下小路と言われておりましたので、上ノ橋から山岸へ抜ける、現在の盛岡市中央公民館付近の個所を図面上で探しました。その下小路の通りの両側には、当時の住人の名前が書かれており、順番に確認していくと、道路の中津川側に「米内新左エ門」と書かれています。他に米内姓の人はいないか確認をしましたが、ありませんでした。そこでもう一枚の図面、盛岡分間絵図のほうも開いてみました。若干不明瞭ではありましたが、確かに「米内新左エ門」とあります。どうやらこの方が米内家の先祖であると推定されました。

しかし、絵図に載っているのは住家各戸の並びが示されているものであり、各住家の位置を特定できるものではありません。なおかつ、各住家の間口が各々どのくらいあったかも不明です。そこで、当時そこに住まわれていた武家の方々の子孫のお名前が、現在の住宅地図に存在するのではないかと期待を込めて照合してみました。時代の流れとは容赦のないもの、特に明治維新と戦争を挟んでいることからでしょうが、全く判断がつきませんでした。さて、と調査チームが考え込んだ時、中央公民館裏手の道路と絵図にある昔の道路の形状がほとんど変わっていないことに気づきました。よく見ると、道路が一部大きく曲がっている場所があります。そこを基準として、米内家の位置を探っていくと、どうも現在の中央公民館入り口付近から国道四号までの間に位置するように思われました。

デスクワークは以上にして、現地を実際に歩いてみようということになりました。

中央公民館から道路に出て、まず最初に絵図で見た旧道の変化点を確認に向かいました。やはり、中央公民館の山岸寄りの敷地周辺が合致するようです。

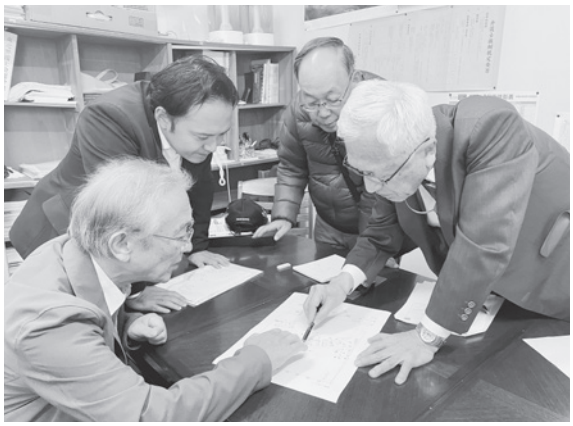
それでは反対側の確認にと向かった時、道路向かいに一人の年配の方がこちらを見ています。調査チームの米内紘正氏が急に道路を渡り、その方のところへ向かいます。お知り合いのようで、しばらくお話をした後、私たちチームを呼びます。何か有益な情報があったのかなと思い道路を渡りました。



デスクワークからフィールドワークへ

米内氏がお話ししていた相手の方は、中央公民館の向かいに事務所を構える高橋耕（たかはしこう）弁護士さんでした。一同ご挨拶がすむと、事務所の中へどうぞとお邪魔することになりました。

そこで、高橋弁護士が言われるには、戦後にこの場所に住んでいるとのこと（事務所の数軒隣に住家がある）。以前、奥様の母上様から、「ここに（住家のほう）以前米内光政さ



高橋氏を囲んで捜索

んが住んでいらっしゃったのよ。」と言われたことを話されました。一同びっくりするやら喜ぶやら。詳しくお聞きすると、高橋弁護士の奥様の母上様が戦後この地に移られたときに、周りの方から言われた話との事です。

果たして、まさにその高橋家の場所なのか、あるいはこの付近という意味なのか、調査チームは高橋弁護士にお礼を言い、事務所を後にしました。

さて、ここまでの調査から分かったことは次の通りです。米内閣下は下小路の生まれであること。盛岡城下町絵図（一八〇六年作成）には、確かに下小路の場所に米内新左エ門という名前があること。その場所は現在の盛岡市中央公民館の向かい付近であること。高橋弁護士の奥様の母上様が、米内さんは高橋家住宅の場所に以前住んでいたと証言していること。

以上です。

このことを踏まえて、調査チームは今後の検討に入りました。

そこで、藤井会長が思い出したようにある本を出してきました。表紙に「米内光政追想録」と書いてあります。この本は、米内閣下の銅像建立を記念して、知遇各氏から寄せられた追想文献を取りまとめたものとあります。（米内光政銅像建設会会長　元海軍大将　高橋三吉　昭和三六年二月）

この本の中に、米内閣下のお住まいについての記述がありました。原文のまま引用します。

「米内さんは愛称を光っつぁんと呼ばれた。明治一三年三月二日盛岡市下小路六十五番戸に呱々の声を挙げた。この場所は下小路と山岸町の境で、ここに道路を横断する石橋があるが、この石橋から下小路寄りに当時同じような茅葺の家が三軒並んでいて、その真ん中の家が米内さんの家であった。つまり旧藩主南部邸、今の盛岡市公民館筋向いに当たるところである。」

我々の別な角度からの調査と概ね一致しています。今後確認が必要なことは、当時の下小路六十五番戸とは、今の地籍台帳によってどこに当たるのか。道路を横断する石橋の場所は今も存在するのか。下小路と山岸町の境は現在の町境と一致しているのか。この原稿締め切りには間に合いませんでしたが、引き続き調査を行い、皆様に結果をご報告いたしたいと考えております。

なお、この調査事業は、米内閣下の生誕の地を確定し、できればその証の石柱等を、米内閣下八〇回忌を目標に建立したいと考えて進めているものです。

（米内光政閣下生誕地調査チーム）





円光寺での七十八回忌法要の様子（令和７年４月20日）







盛岡八幡宮境内にある米内光政閣下銅像の清掃風景（令和７年11月５日）



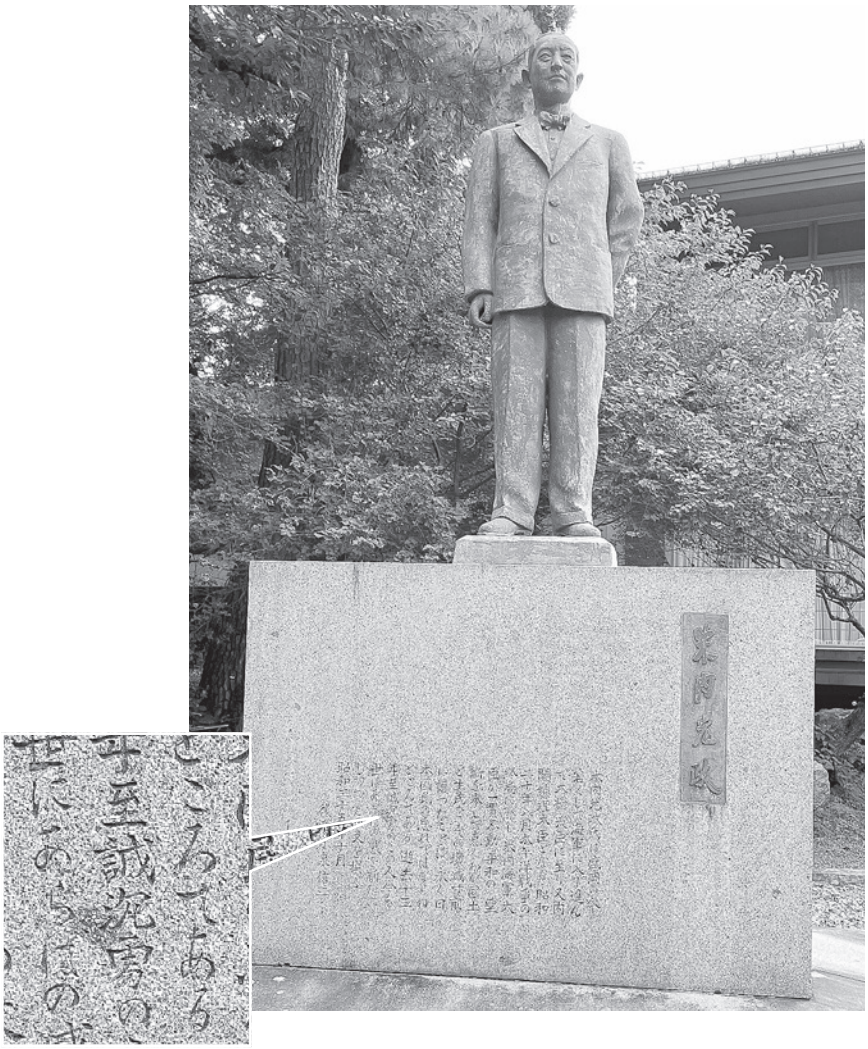
お知らせ

Facebook を始めました。
皆様、ぜひご覧ください。

二次元コードから
Facebook へ！
フォローもよろしく
お願いします♪

表題「至誠沈勇」について

「至誠沈勇」とは、「この上なく誠実で、落ち着いて勇気のある様」を意味する米内光政の人柄を表わしたもの。盛岡八幡宮境内にある崇敬殿前の米内光政像の台座に刻まれた経済学者（慶応義塾大学塾長）小泉信三による撰文より抜粋したもので、銅像の除幕式は昭和三十五年（一九六〇）十月十日に行われた。



米内光政会会報（五号）非売品

令和七年十二月二十日発行

発行所　米内光政会事務局

〒〇二〇―〇八八五

岩手県盛岡市紺屋町四―二十四

印刷所　河北印刷株式会社

盛岡市本町通二丁目八―七

令和7年12月